

Title	春秋經傳集解譯稿續篇(九) : 襄公二十七年~二十八年
Author(s)	岩本, 憲司
Citation	中国研究集刊. 2005, 39, p. 1-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60886
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

春秋經傳集解譯稿續篇(九)

岩本憲司

〔襄公二十七年〕

經二十有七年春齊侯使慶封來聘

孫宣伯之在齊也 叔孫還納其女於靈公 嬖 生景公 丁「鄭僖公初卽位」とある。なお、二十五年の傳文に「叔附五年の傳文に「夏鄭子國來聘 通嗣君也」とあり、注に倒景公が卽位したため、後繼ぎの君を通告したのである。

丑崔杼立而相之」とある。

せず、宋は、主人であり、地をいうのに、「宋で」と(國邾・滕は、屬國とされたため、いづれもみな、盟に參加秦は、たがいちがいに(晉・楚に)朝見することをせず、健傳をしらべてみると、會したのは十四國であるが、齊・

ある。楚の方が晉より先に血を歃ったのに、晉を先に書かる。だから、經はただ九國の大夫をならべているので名を稱)すれば、(それだけで)盟に參加したことがわ

附注の「齊秦不交相見 邾滕爲私屬 皆不與盟」についてではなかったから、石惡の下におかれているのである。て、いつも衞の上にあるが、(今ここでは) 孔奐が上卿いているのは、信を貴んでである。陳は、晉の會におい

以不書齊秦)」とあり、また、「旣而齊人請邾 宋人請滕木使馹謁諸王 王曰 釋齊秦 他國請相見也(注 經所不固請於齊(注 請齊使朝楚)壬申左師復言於子木 子不固請於齊(注 請齊使朝楚)壬申左師復言於子木 子不固請於齊(注 請齊使朝楚)壬申左師復言於子木 子本間請於齊(注 請齊使朝楚) 東午向戌復於趙孟 趙孟は、下の傳文に「子木謂向戌 請晉楚之從交相見也(注

こう。 皆不與盟(注 私屬二國故)叔孫曰 邾滕 人之私也」

寧 尊亦與盟一とある。 公十九年「冬會陳人蔡人楚人鄭人盟于齊」の注に「地於 注の「宋爲主人 地於宋 則與盟可知」については、僖

齊齊亦與盟」とある。

注の「陳于晉會 常在衞上」については、疏に引く『釋傳文に「乃先楚人 書先晉 晉有信也」とある。注の「楚先晉歃 而書先晉 貴信也」については、下の

年 大率皆陳後次蔡 蔡後次衞」とある。例』班序譜に「晉合諸侯二十國 起僖二十八年盡哀十四

經衞殺其大夫甯喜

逆に)宋の會の下に書いているのは、赴告に從ったのでれども、大義としては、後からさかのぼって討つべきでれども、大義としては、後からさかのぼって討つべきでいる、一次をしたという理由で討伐する、ことをしなかったけ

止也 對曰 臣殺之 君勿與知(中略)夏兒餘復攻甯氏微甯子 不及此 吾與之言矣 事未可知 祇成惡名劂下の傳文に「衞甯喜專 公患之 公孫兒餘請殺之 公曰

名 衆也 且言非其罪也」の注に「死者無罪 則例不稱とあり、また、同七年の傳文「書曰宋人殺其大夫 不稱夫陽處父」の注に「處父侵官 宜爲國討 故不言賈李殺」殺甯喜及右宰穀」とある。なお、文公六年「晉殺其大

經衞侯之弟鱄出奔晉

名」とある。

(の申し出)にどっちつかずの返事をした〔免餘の好きかえってその專政をにくみ、(彼を殺そうという〕免餘けもつ」〔二十六年傳文〕と言ったのに、今ここでは、健衞侯は、始めは、「政治は甯氏にまかせ、祭祀は私がう

と書いて、兄を罪責したのである。 弟と仲よくできずに、出奔するようにさせたから、「弟」にさせた)。(つまり)以前の約束をやぶり、その上、賢

く『釋例』に「仲尼因母弟之例以興義 鄭伯懷害弟之心止也 對曰 臣殺之 君勿與知」とある。また、疏に引 微甯氏 不及此 吾與之言矣 事未可知 祇成惡名附下の傳文に「衞甯喜專 公患之 公孫発餘請殺之 公日

身也推此以觀其餘,秦伯之弟鍼 陳侯之弟黃 衞侯之則兄而害弟者。稱弟以章兄罪,弟又害兄 則去弟以罪弟惡,佞夫稱弟,不聞反謀也。鄭段去弟,身爲謀首也然

天王縱羣臣以殺其弟 夫子探書其志

故顯書二兄以首

圝秋七月辛巳豹及諸侯之大夫盟于宋

い〕のである。(なお)このことについては、『釋例』でに違反したということで、貶している〔氏を稱していなな是非を辨別して、おのれ(の判斷)に從ったから、命命ずる力のない君を顯揚する、ことをせずに、ちっぽけ倒夏に會した大夫である。豹は、順(の道)にしたがって、

詳しく論じている

書其族 言違命也」とあり、注に「季孫專政於國 魯君也 我 列國也 何故視之 宋衞 吾匹也 乃盟 故不齊人請邾 宋人請滕 皆不與盟 叔孫曰 邾滕 人之私附下の傳文に「季武子使謂叔孫以公命 曰 視邾滕 旣而

非得有命 今君唯以此命告豹 豹宜崇大順以顯弱命之君

に改める

心,君子以豹不倚順以顯弱命之君,而辨小是以自從,故之,國內固知我君之命不可以違,則季氏有懼,而義士生

以違命貶之也」とある。

| M下の傳文に「十一月乙亥朔日有食之 辰在申 司麻過也時、經がまちがっていることがわかる。
| もし十二月ならば、閏月を三度置き忘れたことになるから、經がまちがっていることがわかる。
| はずである〕。閏月を二度置き忘れたのである」とある。
| はずである」。世紀の前の前の前であり、十二月の前では、十二月の前では、100円では、100円では、100円であり、100円では、100

なお、經の「乙卯」の「卯」は、挍勘記に從って「亥」之九月 斗當建戌而在申 故知再失閏也」とある。 再失閏矣」とあり、注に「謂斗建指申 周十一月 今

る。 は、密である。必ず、内密にやって來て、地を受け取るは、密である。必ず、內密にやって來て、地を受け取る健「諸諸の、邑を喪った者」とは、齊・魯・宋をいう。「周」團二十七年春胥梁帶使諸喪邑者 具車徒以受地 必周

附注の「諸喪邑

謂齊魯宋也」については、二十六年の傳

3)

文に「齊人城郟之歳 取之 逐襲我高魚(中略)克而取之 又取邑于宋」と 其夏齊烏餘以廩丘奔晉 襲衞羊角

④傳は、趙文子が賢であったから、 平公が政治を誤っても、

諸侯は(晉に)親しんだ、ということを言っているので

ある。

比周」等の注に、同文がみえる。なお、その剛を參照。 注の「周 密也」については、文公十八年の傳文「是與

猼使烏餘具車徒以受封

母烏餘は地をひきいて(晉に)來ていたから、詐って、 を封ずることを許可したのである。 彼

圑鳥餘以其衆出

倒出て、封を受けようとしたのである。

附挍勘記に從って、傳文の「以」の下に、「其」の字を補

傳使諸侯僞效烏餘之封者

御「效」は、 して鳥餘を封ずるようなふりをさせたのである 致〔わたす〕である。齊・魯・宋に邑をわた

附文公八年の傳文「效節於府人而出」の注に「效猶致也」 效也 王必罪之」の高誘注に「效 致也」とあるのを參 とある。なお、『戰國策』西周「楚王必求之 而吾得無

猼而遂執之 盡獲之

倒その配下をことごとく捕獲したのである。 而歸諸侯 諸侯是以睦於晉

甅皆取其邑

剛二十六年の傳文に「衞人歸衞姬于晉 以知平公之失政也」とあり、また、「及趙文子爲政 以爲盟主也 討之 使歸其地 今烏餘之邑 卒治之 文子言於晉侯曰 晉爲盟主 請歸之 公日 諾 皆討類也 孰可使也 諸侯或相侵也 乃釋衞侯 而貪之 君子是 胥梁

帶能無用師 晉侯使往」とある。

甅齊慶封來聘 其車美 孟孫謂叔孫曰 慶季之車

傅叔孫曰 豹聞之 団「季」は、慶封の字(あざな)である。 服美不稱 必以惡終 美車何爲

與慶封食 不敬 爲賦相鼠

亦不知也

④「相鼠」は、『詩』の鄘風で、(その第一章に),鼠を視 愚だったことを言っているのである。明年の、慶封が來 とに氣づかなかった、ということであり、彼がひどく暗 方ない,とある。慶封は、この詩が自分のためであるこ いとは。人でありながら儀がなければ、生きていても仕 ても(ちゃんと)皮があるのに、人でありながら儀がな

奔したこと、のために傳したのである。

不亦美

附二十八年に「冬齊慶封來奔」とある。

團衞甯喜專 公患之 公孫兒餘請殺之

阿公曰 微甯子 不及此 団「発餘」は、衛の大夫である。

傳吾與之言矣 ④「ここに及ぶ」とは、國にかえるということである。

④「政治は甯氏にまかせる」(二十六年傳文)と言った。 **傅**事未可知

傳紙成惡名 止也 団伐っても勝てるとは限らない。

(銀「紙」は、適(まさに、ただ)である。

傳對日 臣殺之 君勿與知 乃與公孫無地公孫臣謀 | 附僖公十五年の傳文 「祇以成惡」 等の注に、 同文がみえる。 なお、その附を参照

母二人の「公孫」は、衛の大夫である。

傳使攻甯氏

弗克 皆死

④無地及び臣が、いづれもみな、死んだのである。

團公曰 臣也無罪 父子死余矣

附疏に「十四年傳曰 公使子蟜子伯子皮與孫子盟于丘宮

是臣之父也」とある。 臣也無罪 父子死余 孫子皆殺之 彼所殺者 知是爾時死耳 皆是公子 而此臣是公孫 亦不知彼所殺者誰

倒穀を (經に) 書いていないのは、卿ではなかったからで **嘎夏觅餘復攻甯氏** 殺甯喜及右宰穀 尸諸朝

剛上の經に「衞殺其大夫甯喜」とある。

ある。

甅石惡將會宋之盟 斂以亡 懼不免 且曰 受命矣 受命而出 衣其尸 枕之股而哭之 乃行 欲

倒行って、宋で會したのである。 明年の、 石惡が奔ったこ

附二十八年に「夏衞石惡出奔晉」とある。 と、のために傳したのである。

傳子鮮曰 逐我者出

餓孫林父のことをいう。 附二十年の傳文に「名藏在諸侯之策 君」とあり、二十六年の傳文に「孫林父以戚如晉」とあ 日 孫林父甯殖出其

嘎納我者死

(1) 電客のことをいう。 附二十五年の傳文に「衞獻公自夷儀使與甯喜言

注

求復

傅賞罰無章 國也)甯喜許之」とある。 何以沮勸 君失其信 而國無刑 不亦難乎

() 運國を治めるのが難しい、ということである。

甅且鱄實使之

(理解喜に君を迎え入れさせた、ということである。)

附二十六年の傳文に「衞獻公使子鮮爲復 敬姒強命之

(中略) 許諾 初獻公使與甯喜言 甯喜曰

必子鮮在

甯喜言 曰 苟反 不然 必敗 故公使子鮮 子鮮不獲命於敬姒 政由甯氏 祭則寡人」とある。 以公命與

團遂出奔晉 公使止之 不可

() 留まることに同意しなかったのである。 個及河 又使止之 止使者而盟於河

団かえらないことを誓ったのである。

傅託於木門

④「木門」は、晉の邑である。

傳不鄉衞國而坐

磚木門大夫勸之仕 不可 仕而廢其事

倒うらみが深かったのである。

昭吾所以出也,將誰愬乎 日 從之

④「これに從う」とは、自分の職務をつくすことをいう。 國に)仕えたいがためであったようにしか見えず、自分 職務をつくせば、(どう見ても)自分が出奔したのは(他 (の本當の氣持ち)を誰にも訴えられなくなる、という

ことである。

卿吾不可以立於人之朝矣 終身不仕

† 自らに誓って仕えず、(そのまま) 生涯を終えたのであ

愿公喪之如稅服終身

倒「稅」は「繐」に他ならない。〈喪服〉に「繐の縗裳」 とあり、絲が細くて(目が)あらいもので、五服の制度

は(きまった)月數がなく、獻公はまもなく薨じたから、 いたんだから、特別にこの服を着たのである。この服に の中には入らず、元來(きまった)月數もない。子鮮を

『儀禮』喪服に「繐衰裳 牡麻経 既葬除之者」とあり、 「身を終えるまで(ずっと)」と言っているのである。

以服至尊也
凡布細而疏者謂之繐」とあるのを參照。 如小功而成布四升半細其縷者以恩輕也,升數少者 傳に「繐衰者何 以小功之繐也」とあり、注に「治其縷 ま

之文在大功之下小功之上 是非五服之常也 に「繐 細疏布也」とあるのを參照。なお、疏に「喪服 功之縷而四升半之衰」とあるのを参照。また、『說文』 た、『禮記』檀弓下「請繐衰而環経」の注に「繐衰 既葬除之

なお、異説として、疏に「服虔云 『禮記』 檀弓上「曾子曰 及聞喪而服 是爲稅服 小功不税」の注に「日月已過 服之輕者」とある。ちなみに、 衰麻已除 日月已過

是本無月數也」とある。

乃聞喪而服 曰稅」とある。

傳公與冤餘邑六十一辭曰 唯卿備百邑 臣六十矣 下有上

邑〔小さな單位の邑〕ではない。『論語』(公冶長)では、倒ここは、一乘の邑〔大きな單位の邑〕であって、四井の

ていて、(「邑」は) 明らかに(大小に)共通の稱謂であ「千室(之邑)」と稱し、また、「十室(之邑)」と言っ

る。ていて、(「邑」は) 明らかに (大小に) 共通の稱謂であ

井」とある。 また、二十六年の傳文「先八邑」の注に「八邑 三十二附疏に引く『司馬法』に「成方十里 出革車一乘」とある。

「十」に、それぞれ改める。なお、諸本に従って、注の「十」を「千」に、「千」を

與之受,其半以爲少師公使爲卿,辭曰大叔儀不貳,傳臣弗敢聞,且甯子唯多邑故死,臣懼死之速及也。公固

④「贊」は、佐である。

能贊大事

|附閔公二年の傳文「以此贊國」の注に「贊 助也」とある。

なお、その例を参照。

㈱二十五年の傳文「大叔文子聞之」の注に「大叔儀也」と

ある

名されていることによっていることである。

團宋向戌善於趙文子 又善於令尹子木

欲弭諸侯之兵以爲

倒民を休めたという名聲を得ようとしたのである。

公十四年の傳文に「息民五年」とある。る。なお、隱公七年の傳文に「以繼好息民」とあり、昭剛成公十六年の傳文「憂猶未弭」の注に「弭善息也」とあ

四例如晉 告趙孟 趙孟謀於諸大夫 韓宣子曰 兵 民之殘

のは、財用之蠹

||例『説文』に「蠹||木中蟲」とあるのを参照。また、『戦||銀「蠹」は、物を害する蟲である。

誘注に「蠹」害也」とあるのを参照。 國策』秦一「則是一舉而壞韓蠹魏挾荆以東弱齊燕」

傳小國之大菑也 將或弭之 雖曰不可 必將許之

ここでは、許さないわけにはゆかない、ということであ母兵は長くは休めることが出來ないとわかっていても、今

如楚一楚亦許之一如齊一齊人難之一陳文子曰 晉楚許之四時,楚將許之以召諸侯 則我失爲盟主矣 晉人許之

焉用之一齊人許之一告於秦、秦亦許之一皆告於小國、爲我焉得已,且人曰弭兵,而我弗許,則固攜吾民矣,將

の高

五月甲辰晉趙武至於宋 丙午鄭良霄至 六月丁

未朔宋人享趙文子 叔向爲介 司馬置折俎

禮也

④「折俎」とは、肢體をばらばらにして俎にのせるのであ る。卿を享宴する禮に合致していたから、「禮也」と言

っているのである。『周禮』では、司馬が會同の事をつ

附宣公十六年の傳文に「王享有體薦 祭」とあるのを參照 帥士庶子而掌其政令(中略)大祭祀饗食 謂諸侯)」とある。なお、『周禮』大司馬に「大會同 節折、升之於俎)公當享、卿當宴、王室之禮也(注 宴有折俎(注 羞牲魚 授其 體· 解·

母宋の向戌は、兵を休めるという趣意を自ら稱揚して、う 19個中尼使舉是禮也 以爲多文辭

やうやしく趙武を迎え、趙武・叔向は、享宴の會に因ん で、賓主の辭をのべた。だから、仲尼は、文辭(りっぱ

附疏に「服虔云 以其多文辭 故特舉而用之 後世謂之孔 氏聘辭 以孔氏有其辭 故傳不復載也」とある。

な言葉〕が多いと評したのである。

圑戊申叔孫豹齊慶封陳須無衞石惡至

Œ

「須無」は、陳文子である。

附二十三年の傳文「陳文子見崔武子」の注に「文子 之孫須無」とある。 陳完

傳甲寅晉荀盈從趙武至

附下の傳文に「晉荀盈遂如楚涖盟」とある。 と言っているのである。後に、武は盈を楚に行かせた。 @趙武が盈に命じて自分のあとを追わせたから、「從趙武.

傳丙辰邾悼公至

街小國だから、君が自ら來たのである。

④この時、令尹の子木は陳に止まっていて、 黑肱をやって 傳壬戌楚公子黑肱先至 成言於晉

晉の大夫のもとで盟載の言辭の打ち合わせをさせ、雙方

が了承したのである。

團丁卯宋向戌如陳 從子木成言於楚 団陳で楚の盟約の言辭を打ち合わせたのである。

剛挍勘記に從って、傳文の「宋」の下に、「向」の字を補

う。

附上の傳文「丙辰邾悼公至」の注に「小國 故君自來」と (銀やはり小國だから、君が自ら來たのである。

傅戊辰滕成公至

傳子木謂向戌 請晉楚之從交相見也

ある。

铟諸侯で晉・楚に從っている者を、たがいちがいに 晉に)朝見させる、ということである。

甅庚午向戌復於趙孟 趙孟曰 晉楚齊秦 匹也 晉之不能

於齊 猶楚之不能於秦也

團楚君若能使秦君辱於敝邑 寡君敢不固請於齊)。 避服從させて使うことが出來ない、ということである。

母齊へ要請して楚に朝見させる、ということである。

圓壬申左師復言於子木 子木使馹謁諸王

乘馹」の注に「馹 傳車也」とある。なお、その鮒を參鯏注の「馹 傳也」については、文公十六年の傳文「楚子⑪「馹」は、傳〔驛傳の車〕である。「謁」は、告である。

傳王曰 釋齊秦 他國請相見也

檲秋七月戊寅左師至 餓だから、經には齊と秦が書かれていないのである。

④陳からもどったのである。

剛上の傳文に「丁卯宋向戌如陳」とある。

傳是夜也 趙孟及子晳盟 以齊言

ないよう、あらかじめ盟辭を統一したのである。 (銀)「子皙」は、公子黑肱である。 盟う時に争いが起こり得

俄二國の大夫は、子木といっしょに到着したのである。

嘎庚辰子木至自陳 陳孔奐蔡公孫歸生至

傳曹許之大夫皆至 以藩爲軍

語八「是行也 以藩爲軍」の韋注に「藩 籬落也 不設者 方欲弭兵以示不相忌也」とある。なお、『國語』晉附疏に「古人行兵 止則築爲壘塹以備不虞 此以藩籬爲軍餓互いに用心しない〔敵意がない〕ことを示したのである。

卿晉楚各處其偏 壘壁」とあるのを參照。

團伯夙謂趙孟 趙晉は北に位置を占め、楚は南に位置を占めたのである。

|附異説として、疏に「服虔云 伯夙 晉大夫」とある。||④「伯夙」は、荀盈である。

傳日 楚氛甚惡 懼難

() ことである。 () ことである。 をに晉を襲う氣配がある、という

不過望氛祥」の韋注に「凶氣爲氛(吉氣爲祥」とあるの望氛」の注に、同文がみえる。なお、『國語』楚語上「臺㈱注の「氛(氣也」については、昭公二十年の傳文「梓愼

團趙孟曰 吾左還 入於宋 若我何

を参照

急の時には、左まわりに宋の東門に入ることが出來るのら、晉の軍營は(最も)東にあった。(したがって) 危餓 (諸侯の) 軍營は宋の北にあり、東寄りを上位としたか

てある

圑辛巳將盟於宋西門之外 楚人衷甲

坐したのである。 母衣の中に甲〔よろい〕を着込み、會に乘じて晉を擊とう

附宣公九年の傳文「皆衷其衵服」の注に「衷 懷也」とあ

焉用有信 大宰退請釋甲 子木曰 晉楚無信久矣 事利而已 苟得志焉望信於楚 是以來服 若不信 是棄其所以服諸侯也 固團伯州犂曰 合諸侯之師 以爲不信 無乃不可乎 夫諸侯

街「大宰」は、伯州犂である。

- P.。 | 附成公十六年の傳文に「子重使大宰伯州犂侍于王後」とあ

団志・言・信の三者が備わって始めて、身が安泰に保たれ乎玉以致言言以出信信以立志参以定之個告人日令尹將死矣不及三年求逞志而棄信志將逞

る、ということである。

傳信亡 何以及三

御明年の、子木が死んだこと、のために本を起こしたので

附二十八年の傳文に「楚屈建卒」とある。

④「單」は、盡である。「斃」は、踣(たおれる)である。

均刑法以儀民」の韋注に「單 盡也」とあるのを參照。 附注の「單 盡也」については、『國語』魯語上「堯能單

注の「斃 踣也」については、閔公元年の傳文「難不已均刑法以儀民」の韋注に「單 盡也」とあるのを參照。

八「信反以斃」の韋注に「斃の踣也」とあるのを參照。言に「斃の踣也」とあるのを參照。また、『國語』晉語

將自斃」等の注に、同文がみえる。なお、『爾雅』釋

働「不病」とは、ことごとく命を落とす〔病氣だけではす鴈若合諸侯之卿 以爲不信 必不捷矣 食言者不病

まない〕ということである。

病 病也 謂食言者豈不病乎」とあり、また、楊伯峻『春とある。なお、異説として、焦循『春秋左傳補疏』に「不附昭公七年の傳文「匹夫匹婦強死」の注に「強死 不病也」

秋左傳注』に「不病蓋省文 言不足困人也」とある。

⊕楚は約束を反故にしているから、死ぬはずで、晉は約束 贋非子之患也

る。なお、その例を参照。 附僖公十五年の傳文「我食吾言」の注に「食 消也」とあを守っているから、心配ない、ということである。

團夫以信召人 而以僭濟之

(注「濟」は、成である。

附文公十八年の傳文「世濟其美」等の注に、同文がみえる。 なお、その附を参照

団楚に攻められたら、宋の城に入る、ということである。 **圑**必莫之與也 安能害我 且吾因宋以守病

附上の傳文に「趙孟曰 吾左還 入於宋 若我何」とある。 なお、異説として、陸粲『左傳附注』に「病字宜讀屬下 謂爲楚所攻而病 則宋與受其禍 必能致死助我也」と

傅則夫能致死 與宋致死 雖倍楚可也

|附『會箋』に「雖倍楚可也 力が楚の倍になり得る、 ということである 是省文法 猶云雖曰俉楚可也」

(3)宋は地主であるから、 命がけで我々を助けてくれれば、

とあるのを參照。なお、 注』に「縱加一倍楚軍猶可抗拒」とある。 異說として、楊伯峻『春秋左傳

傳子何懼焉 又不及是 曰弭兵以召諸侯 而稱兵以害我

附宣公十六年の傳文「禹稱善人」等の注に、同文がみえる。 ④「稱」は、舉である。

なお、その附を参照。 非所患也

母音だけが信頼を得るから、(かえって) こちらの功績が 多いのである。

> | 例僖公二十七年の傳文「車服以庸」の注に「庸 功也」と

嘎季武子使謂叔孫以公命 視邾滕

日

母音と楚との兩方に仕えれば、 の言葉に從わないことを恐れたから、公命を假りて彼に に扱ってもらおうとしたのである。武子は、叔孫が自分 貢賦が重いから、 小國なみ

迫ったのである。

附經の疏に引く『釋例』に「季氏專魯 祿之去公室三世矣 難以矯時 故季孫憚之 不敢以己意 制命出於私門 非國所知也 叔孫豹 魯之賢臣 假公命以敦叔孫

也」とある。

傳旣而齊人請邾 宋人請滕 皆不與盟

圍叔孫曰 邾滕 人之私也 我 建二國に私屬したからである。 吾匹也 乃盟 故不書其族 言違命也 列國也

母季孫が國の政治を專らにしていて、魯君は命を出せなか るのである。 斷する) ちっぽけな正義を遂行した。 だから、 貶してい い君を顯揚すべきであるのに、(かえって)おのれの(判 のだから、豹は、大順(の道)を崇んで、命ずる力のな ったが、今ここで、君がかろうじてこの命を豹に告げた

附經の注に「豹不倚順以顯弱命之君 而辨小是以自從

故

以違命貶之」とある。なお、異說として、疏に「賈逵云 義也 魯疾之 非也」とあり、また、「服虔云

得之」とある。 叔孫欲尊魯國不爲人私 雖以違命見貶 其於尊國之義

碼晉楚爭先

団先に血を飲ることを争ったのである。

|附『國語』 晉語八に「宋之盟 注に「歃 歃血也」とあるのを參照 楚人固請先歃」とあり、韋

傳晉人曰 晉固爲諸侯盟主 未有先晉者也 楚人曰 晉楚匹也 若晉常先 是楚弱也 且晉楚狎主諸侯之盟也 子言

④「狎」は、更〔かわるがわる〕である。 |附昭公二十一年の傳文「不狎||鄙」の注に、同文がみえる。

の韋注に「狎 更也」とあるのを參照。 なお、『國語』晉語八「今將與狎主諸侯之盟 唯有德也」

甅豈專在晉 叔向謂趙孟曰 諸侯歸晉之德只

④「只」は、辭〔虚詞〕である。 附『説文』に「只語已詞也」とあるのを參照。

傅非歸其尸盟也

④「尸」は、主(つかさどる)である。 **附成公十七年の傳文「殺老牛莫之敢尸」の注に、同文がみ**

える。なお、その剛を參照。

傳子務德 ⑪小國が準備をつかさどる、ということである。 無爭先 且諸侯盟 小國固必有尸盟者

隀楚爲晉細 不亦可乎

| 例『國語』晉語八「乃先楚人」の韋注に「讓使楚先」とあ 囲譲って楚に盟をつかさどらせようとしたである。 るのを参照

附序に「諸稱書不書先書故書不言不稱書曰之類 **磚乃先楚人 書先晉 晉有信也** (武おそらく、孔子が後からさかのぼって正したのであろう。

皆所以起

新舊發大義 謂之變例」とある

圑壬午宋公兼享晉楚之大夫 趙孟爲客 ④「客」とは、一坐が尊ぶものである。だから、季孫が大 夫たちに酒を飮ませたとき、臧紇が客となったのである。

附二十三年の傳文に「季武子無適子 公彌長

而愛悼子

吾爲子立之

欲立之(中略) 訪於臧紇 臧紇曰 飲我酒

以爲客也」とあるのを參照。 以露賭父爲客」の韋注に「客 上客也 禮 ある。なお、『國語』魯語下「公父文伯飮南宮敬叔酒 季氏飲大夫酒 臧紇爲客」とあり、注に「爲上賓」と 飲算一人

なお、異説として、疏に「服虔云 楚君恒以大夫爲賓者 爲客」とある。これについては、李貽德『春秋左傳賈服 大夫卑 雖尊之 猶遠君也 楚先歃爲盟主 故尊趙孟

爲疑也 注輯述』に「案燕禮記曰 失 又云 此則兼享晉楚大夫 異於常禮 以尊敬伯主之 言之 非謂楚人爲主也 至服云楚先歃爲盟主者。實謂宋以楚爲盟主耳。不言宋以 孫飮大夫酒 臧紇爲客 楚稍降也 魯語云 公父文伯飲南宮敬叔酒 路堵父爲客 與君太相近 賈疏云 是當時大夫燕飲猶存此意 出自當時意耳 模稜之語 宋爲主 非楚爲主 今宋公以楚先歃 尊爲盟主 故不以子木爲賓 猶遠於君 不畏逼君也 故令趙孟爲賓 若然則歃盟之時 趙孟旣甘讓人 以上文有君恒以大夫爲賓之文 義足相包 按禮記燕義云 猶燕禮以大夫爲賓

聘禮有燕以上介爲賓 明嫌之義也 宋公復欲尊晉 楚氛甚惡 兼享晉楚之大夫 不以屈建爲賓者 賓惟一人 是不用公卿爲賓 恐逼君 注 與此注同 可證楚君之楚爲燕之誤文 注云 服之妄也 由于袒杜過甚 君恒以大夫爲賓者 此實違棄古禮 不以公卿爲賓 乃孔氏不細勘服義 與卿燕 杜云 公卿尊矣 聘禮記云 竊所未了 不若服氏援據禮 客 一 坐 所 尊 何以使子木帖然乎 則大夫爲賓 燕 豈可爲典要乎 復以爲賓 而以大夫爲賓 大夫爲賓 大夫卑 遽云 則上介爲賓 故此不申 遂致此 而以趙 與大夫

- 團子木與之言 弗能對 使叔向侍言焉 子木亦不能對也 其說于理爲允愜耳」とあるのを參照。

乙酉宋公及諸侯之大夫盟于蒙門之外

「蒙門」は、宋の城門である。り、かさねて盟ったから(經に)書いていないのである。分の國にいたから、へりくだってかさねて盟ったのであなかったのは、禮に適っている。今ここで、宋公は、自餓先の盟で、諸大夫が公に匹敵する〔公と盟う〕ことをし

子男可也」とある。なお、僖公二十九年の傳文に「在禮 卿不會公侯 會伯剛上の經に「秋七月辛巳豹及諸侯之大夫盟于宋」とある。

(超士會 (范武子) の賢は、諸侯に評判だったから、たづね

傳子木問於趙孟曰 范武子之德何如

「初受隨 故曰隨武子 後更受范 復爲范武子」とある。とあり、また、宣公十七年の傳文「范武子脟老」の注に附僖公二十八年の傳文「士會攝右」の注に「士會 隨武子」

神無愧辭 神無愧辭 まが晉國無隱情 其祝史陳信於鬼團對曰 夫子之家事治 言於晉國無隱情 其祝史陳信於鬼

である。 十分適っているから、愧じるところがない、ということ倒祝が馨香〔かぐわしきかおり〕を述べても、德がそれに

審察時事

知趙孟謙抑之衷

既肯下楚

既退就賓位

|附桓公六年の傳文に「所謂馨香無讒慝也」 とあり、注に「馨

以昭其馨香」とあるのを參照 香之遠聞」とある。なお、『國語』周語上に「其德足

④「尙」は、上である。

傳子木歸以語王 王曰

尙矣哉

| 例 『 國語』 晉語四 「 尙有晉國 」 の 韋注に 「 尙 るのを参照 上也」とあ

僡能歆神人

④「歆」は、享〔うける〕である。神に自分の祭をうけさ せ、人を自分の德になつかせる、ということである。

附僖公十年の傳文「神不歆非類」の注に、「歆 饗也」と ある。なお、異說として、兪樾『羣經平議』に「國語周

是其義也 一歆字兼神人而言 杜解未得其旨」とある。 民歆而德之 韋注曰 歆猶欣欣喜服也 謂神人皆喜之也 周語曰 事神保民 莫不欣喜 然則能歆

④ 「五君」とは、文・襄・靈・成・景をいう。

團宜其光輔五君以爲盟主也

子 佐文襄爲諸侯 諸侯無二心 及爲卿 以輔成景 公爲大傅也」とある。なお、『國語』晉語八に「世及武 國無姦民

後之人可則

是以受隨范」とあるのを參照

附疏に「服虔云 文公爲戎右 襄靈爲大夫 成公爲卿 無敗政 及爲成師 居太傅 端刑法 緝訓典

> **傅子木又語王日** 之 不可與爭 晉荀盈遂如楚涖盟 宜晉之伯也 有叔向以佐其卿

(建かさねて晉・楚のよしみを結んだのである) **剛傳文の「寅」は、挍勘記に從って、「盈」に改める。**

圑鄭伯享趙孟于垂隴

団宋から歸る途中、鄭を通過したのである。

団「二子石」とは、印段と公孫段である。 **甅子展伯有子西子産子大叔二子石從**

堕趙孟曰 七子從君 以龍武也 請皆賦 以卒君貺 附下の傳文に「印段賦蟋蟀 (中略) 公孫段賦桑扈」とある。 武亦

囲詩は志を言うもの(だから)である。 以觀七子之志

剛下の傳文に「詩以言志」とある。なお、『莊子』天下に 序に「詩以達意」とあるのを參照。 「詩以道志」とあるのを參照。また、『史記』太史公自

傳子展賦草蟲

④「草蟲」は、『詩』の召南で、 (その第一章に),君子に 私の心は(しずまって)へり降る"とある。趙孟を君子 あわないうちは、心配で仕方ないが、あって顔をみれば

團趙孟曰 善哉 民之主也 に比したのである。

倒上位にいながら、へり降ることを忘れないから、民の主

となれる、ということである

別下の傳文に「子展其後亡者也 在上不忘降」とある。

甅抑武也 不足以當之

母君子(に比せられること)を辭退したのである。

原伯有賦鶉之賁賁

ている。という句に意義を取ったのである。の中の)。ろくでもない人を、私は兄とし、私は君としめで、鶉鵲にも及ばない、ことを刺ったものである。(そぼ)「鶉之賁賁」は、『詩』の鄘風で、衞人が、その君が淫

()第)は、簀(すのこ)である。この詩は、淫亂を刺っ團趙孟曰 牀笫之言不踰閾 況在野乎 非使人之所得聞也

「使人」とは、趙孟自身をいう。っているのである。「閾」は、門の限〔しきみ〕である。

たものであるから、「牀笫の言」(ねやのかたらい)と言

ころる。 とあるのを参照。なお、『爾雅』釋器にも「實謂之第」とあるのを参照。なお、『爾雅』釋器にも「實謂之第」の「麻」所以養體也」の〈集解〉に「服虔曰「實謂之第」

附注の「第 簣也」については、『史記』禮書「疏房床第

注の「閾 門限」については、僖公二十二年の傳文「見とある。

照。 兄弟不踰闞」の注に、同文がみえる。なお、その附を參

甅子西賦黍苗之四章

街「黍苗」は、『詩』の小雅で、その第四章に,嚴正なる

謝邑の工事は、召伯がこれを治め、威武さかんなる遠征

軍は、召伯がこれを成した。とある。 趙孟を召伯になぞ

らえたのである。

傳趙孟曰 寡君在 武何能焉

母善を自分の君に譲ったのである。

傅子産賦隰桑

(祖)「隰桑」は、『詩』の小雅で、君子に會い、心を盡して

であり、(その第一章に)、君子に會えれば、どんなに樂これに仕える、ことを思う、という點に意義を取ったの

しいことであろう"とある。

附詩序に「隰桑 刺幽王也 小人在位 君子在野

思見君

團趙孟曰 武請受其卒章

子盡心以事之」とあるのを參照

忘れない"とある。趙武は、子産に教誨されることを望はいられない。心の中でよみするから、いつになっても倒卒章に、心に愛するから、遠くても勤め(て思わ)ずに

| M||鄭箋に「遐遠 謂勤 臧 善也 我心愛此君子 君んだのである。

平」とあるのを參照。 子雖遠在野 又誠不能忘也 豈能不勤思之乎 孔子曰 愛之能勿勞乎 なお、注の「藏」は、これに從っ 宣思之也 我心善此君子 忠焉能勿誨

甅子大叔賦野有蔓草

て、「臧」に改める。

④「野有蔓草」は、『詩』の鄭風で、その中の,期せずし て遇えたら、わが願いに適う。という句に(意義を)取 ったのである。

傳趙孟曰 吾子之惠也

倒大叔が、遇えたことを喜んだから、趙孟は、その好意を 受けたのである。

圑印段賦蟋蟀

④「蟋蟀」は、『詩』の唐風で、(その第一章に),樂しみ うことである 畏れ愼しむ, とある。畏れ愼しんで禮儀を顧みる、とい 樂しみを好んでも、すさむことがない。すぐれた人は、 過ぎることがなく、つとめて自分の家のことを考える。

剛毛傳に「瞿瞿然顧禮義也」とあるのを參照

倒よく畏れ愼しんで、すさむことがないから、家を保てる、 ということである 善哉 保家之主也 吾有望矣

磚公孫段賦桑扈

④ 「桑扈」は、 『詩』の小雅で、君子は、禮文があるから、 たのである。 天の福祿を受けることが出來る、という點に意義を取っ

傳題 超量 医交距 敖福 將焉往 **附詩序に「桑扈** り、第一章に「君子樂胥 受天之祜」とあるのを參照 刺幽王也 動無禮文焉」とあ

君臣上下

のまま意義を取ったのである。

団これは、〈桑扈〉の詩の卒章であり、

趙孟は、そこにそ

④「誣」と言っているから、鄭伯に淫亂の事實はなかった 傳若保是言也 有將爲戮矣 詩以言志 志誣其上 而公怨之 欲辭福祿 得乎 卒享 文子告叔向日 以爲賓榮

ものを、賓客の榮譽にした」と言っているのである。 **ふよう(鄭の七子に)提唱したから、「公が怨むような** のである。趙孟は、詩を賦して自分に光榮を與えてくれ

附上の傳文に「趙孟曰 七子從君 以寵武也

請皆賦

以

卒君
駅 武
亦以
觀
七
子
之
志
(
中
略
)
伯
有
賦
鶉
之
賁
賁
」
と

之不若 義取人之無良 我以爲兄 我以爲君也」とある。 あり、注に「鶉之賁賁 詩鄘風 衛人刺其君淫亂

來之怨 以爲對賓之榮樂也」とある。つまり、「公」を なお、傳文の「而公怨之 以爲賓榮」については、 鄭君と解する説と、公然とと解する説とがある。杜預が 「反將公之所怨 以爲賓之榮寵 劉炫云 而公顯然將比

どちらに解しているかは、あまりはっきりしないが、 「誣」を強調していることからして、前者の可能性が高

厚其能久乎 幸而後亡 いのではあるまいか(?)。

④必ず先に亡びる、ということである。 附異説として、 王引之『經義述聞』に「家大人曰 杜以下

則爲戮 故上文云 伯有將爲戮也 哀二十五年傳 以後亡二字連讀 亡謂出奔也 言伯有幸而後得亡 文云 子展其後亡者也 故以後亡連讀 乃得後亡 否則必先亡也 不知此以而後二字連讀 褚師出曰 今日幸而後亡 杜彼注云 謂伯有必徼天幸 恐死

以得亡爲幸 是其明證矣 宋其亡乎 幸而後敗 皆以而後二字連讀」とある。 亦謂幸而後止於敗 不幸則亡 僖二十一年傳 宋公子目夷

(銀)「稔」は、年である。三十年の、鄭が良霄(伯有)を殺 然 已侈 所謂不及五稔者 夫子之謂矣

したこと、のために傳したのである。

|附『國語』晉語八「鮮不五稔」の韋注に「稔 年也」とあ るのを參照。なお、三十年に「鄭人殺良霄」とある。

堕文子曰 〈草蟲〉を賦して、、私の心は(しずまって)へり降る 其餘皆數世之主也 子展其後亡者也 在上不忘

"と言った、ことをいう。

剛上の傳文に「子展賦草蟲」とあり、注に「草蟲 日 未見君子 憂心忡忡 亦旣見止 亦旣觀止

則降」とある。

Œ **甅印氏其次也 樂而不荒** 〈蟋蟀〉を賦して、,樂しみを好んでも、 すさむことが

ない。と言った、ことをいう。

剛上の傳文に「印段賦蟋蟀」とあり、注に「蟋蟀 無以大康 職思其居 好樂無荒 良士瞿瞿」とあ

詩唐風

團樂以安民 不淫以使之 後亡 不亦可乎

る

傳宋左師請賞 曰 請冤死之母

御宋の君が功をたたえて厚賞を與えることを望んだから、

附疏に「服虔云 へりくだって、「冤死の邑」と言ったのである。 向戌自以止兵 民不戰關 自矜其功 故

求冤死之賞也

如服此言 冤死謂止兵不關

民冤死也

杜以爲謙 則向戌自以爲己冤死也 若使計謀不當 則罪 合死 自矜其功 言己得免死 故請賞邑也」とある。

個公與之邑六十 以示子罕 子罕曰 凡諸侯小國 事大國 所以存也 以兵威之 畏而後上下慈和 慈和而後能安靖其國家 無威則驕 驕 則 亂 生 亂生必滅 晉楚所

天生五材

(3)金・木・水・火・土である。

附『周禮』考工記〈總敍〉「以飭五材」の注に「鄭司農云 也」とあるのを參照 (中略)春秋傳曰 天生五材 民並用之 謂金木水火土

卿民並用之 廢一不可 誰能去兵 兵之設久矣 軌而昭文德也 聖人以興 所以威不

ປ湯・武をいう。

傳亂人以廢

圑廢興存亡昬明之術 ④桀・紂をいう。

之甚也 以誣道蔽諸侯 罪莫大焉 縱無大討 削而投之 而又求賞 無厭

邸左師に賞を與えるという書札 (の文字) を削ったのであ

|附傳文の「蔽」については、錢大昕『十駕齋養新錄』卷二

知服本作弊 王肅董遇本皆作蔽 肅董遇並作弊 〈蔽〉に「正義云 杜本作蔽 當如王董爲蔽掩之也(陸氏釋文云 服虔王 與正義不同 服虔曰 恐陸氏誤也)案如王董說當 謂以誣人之道掩諸侯也 踣也 一日 罷也

以誣道二字連文 如服說當以道弊連文 襄十一年 范宣

諸侯道敝而無成

能無貳乎

與此傳同義

求」の下に、「去」の字を補う。 用」とあるのを參照。なお、諸本に從って、傳文の「子 兼事晉楚 則罷于奔命也 當從服說作弊爲是 弊敝古诵

傅左師辭邑向氏欲攻司城

附六年の傳文に「司城子罕曰」とある。 ④「司城」は、子罕である。

曰 彼己之子 邦之司直

④『詩』の鄭風(羔裘)である。 「司」は、

甅左師曰 我將亡 夫子存我

德莫大焉

又可攻乎

主である。

傳樂喜之謂乎

附毛傳に「司

主也」とあるのを参照

皆兵之由也 而子求去之 不亦誣乎

④「樂喜」は、子罕である。彼が向戌に阿諛しなかったこ とをほめているのである。

附注の「樂喜 子罕也」については、九年の傳文「樂喜爲 司城以爲政」の注に、同文がみえる。

磚何以恤我 我其收之

附異説として、恵棟『春秋左傳補註』に「顧炎武云 見周 ④逸詩である。 「恤」は、憂であり、 「收」は、 古謐溢字通 棟案 頌云 假以溢我 慎也 故毛傳亦訓溢爲愼 鄭氏訓爲盈溢 伏生尚書云 說文及廣韻引詩云 失之 杜氏訓恤爲憂 今傳作恤 維刑之謐哉 與毛傳義合 取である。 古文作恤 誐以謐

說文云 誐 嘉善也 毛傳訓假爲嘉 義亦同」とあ

る

誤

傅向
戌
之
謂
乎

(銀向戌がよく自分の過ちに氣づいたことをほめているので

甅齊崔杼生成及彊而寡

() つれあいを失った者を「寡」という。 「寡」は、特〔ひ とり〕である。

| 剛『詩』小雅〈鴻鴈〉「爰及矜人 | 哀此鰥寡」の毛傳に 偏喪曰寡」とあるのを參照。 一老

傅娶東郭姜 生明 東郭姜以孤入 曰棠無咎

無妻曰鰥

④「無咎」は、棠公の子である。

附二十五年の傳文に「齊棠公之妻 東郭偃之姊也 東郭偃

偃取之」とある。 臣崔武子 棠公死 偃御武子以弔焉 見棠姜而美之 使

傅與東郭偃相崔氏

団「東郭偃」は、姜の弟である。

例すぐ上の例を参照!

() 選 疾 が あっ たの で ある。 剛傳文の「病」は、諸本に從って、「疾」に改める。

> **猼**而立明 成請老于崔

砂湾南の東朝陽縣の西北部に崔氏城がある。成は、

崔邑に

居を構えて、餘生を送ろうとしたのである。

卿崔子許之 偃與无咎弗予 曰 ④「宗邑」は、宗廟がある所である。「宗主」とは、崔明 をいう。 崔 宗邑也 必在宗主

附哀公十四年の傳文「薄

宗邑也」の注に「宗廟所在」と

ある。

圑成與彊怒 將殺之 告慶封日 夫子之身 大恐害夫子 亦子所知也

④「夫子」とは、 崔杼をいう。 唯无咎與偃是從 父兄莫得進矣

圑慶封日 子姑退 吾圖之 告盧蒲嫳

団「媻」は、慶封の下屬の大夫である。 ったことを、嫳に話したのである。 封は、

成と彊が言

| 例『史記』齊世家「使崔杼仇盧蒲嫳攻崔氏」の 「賈逵曰 嫳

子何病焉

傳盧蒲嫳曰

④「君」とは、齊の莊公をいう。崔杼に弑されたのである。

附二十五年に「夏五月乙亥齊崔杼弑其君光」とある。

甅崔之薄 慶之厚也

④崔が敗壞すれば、慶が權力を獨占できる、ということで

齊大夫慶封之屬」とあるのを參照 君之讎也 天或者將棄彼矣 彼實家亂 〈集解〉に

猼他日又告

団成と彊がまた告げたのである。

圑慶封日 苟利夫子 必去之 難 崔彊殺東郭偃棠无咎於崔氏之朝 崔子怒而出 吾助女 九月庚辰崔成 其衆皆逃

御「圉人」は、馬を養う者である。「寺人」は、奄士(宦 求人使駕 不得 使圉人駕 寺人御而出

附注の前半については、 莊公三十二年の傳文 「圉人犖自牆 外與之戲」の注に「圉人 掌養馬者」とある。なお、そ 官) である。

の注に、同文がみえる。なお、その附を参照 注の後半については、成公十七年の傳文「寺人孟張奪之」 の例を参照。

傳且曰 崔氏有福 止余猶可

⑪家まで滅し、禍害が自身に止まらない、ことを恐れたの

である。

傳遂見慶封 慶封日 ④一家も同然、ということである。 崔慶一也

④「堞」は、短垣 (ひめがき) である。 家臣たちに、短垣 傳是何敢然 請爲子討之 使鷹蒲嫳帥甲以攻崔氏 其宮而守之 崔氏堞

の内に立て籠って守らせたのである。

圑弗克 使國人助之 遂滅崔氏 附六年の傳文「傅於堞」の注に「堞 お、その附を参照。 殺成與彊 女墻也」とある。な 而盡俘其家

④「妻」とは、東郭姜である。

嘎嫳復命於崔子 且御而歸之

母嫳が崔子のために車を御したのである。

傳至 則無歸矣 乃縊

④ (二十五年の),自分の家に入っても、妻に會えない。 凶である, という占に、結末をつけたのである

甅崔明夜辟諸大墓

御先人の墓に穴を掘って(崔杼の尸を)埋めたのである。 | 附二十三年の傳文 「冬十月孟氏將辟」 の注に 「辟 とある。なお、二十八年の傳文に「求崔杼之尸 穿藏也

不得」とある。

嘎辛巳崔明來奔 慶封當國

④「當國」とは、政權を握ったのである。

傳楚遠罷如晉涖盟

附昭公五年の傳文に「使與令尹子蕩如晉逆女」とある。ま 街「罷」は、令尹の子蕩である。荀盈に返報したのである。 た、上の傳文に「晉荀盈遂如楚涖盟」とある。

傳晉侯享之 賦旣醉

④「旣醉」は、『詩』の大雅で、 (その第一章に),もうす 萬年の壽を保ち、(天が)汝の大福をより大にする(or 彼を太平の君子になぞらえたのである。 助ける),とある。この詩によって晉侯をほめたたえ、 っかり酒に醉い、もうすっかり德に滿足した。君子は、

附詩序に「旣醉 太平也 とあるのを参照 醉酒飽德 人有士君子之行焉

④政權は必ず彼に歸する、 ということである。 子蕩將知政矣 敏以事君 **蓬氏之有後於楚國也** 必能養民 宜哉 承君命 政其焉往 不忘敏

述している。

傅崔氏之亂

建二十五年にある。 附二十五年に「夏五月乙亥齊崔杼弑其君光」とある。

傳申鮮虞來奔 僕賃於野 以喪莊公

団齊の莊公のために喪に服していた。

團冬楚人召之 遂如楚 爲右尹

() 傳は、 楚がよく賢を用いたことを言っているのである。

卿十一月乙亥朔日有食之 辰在申 司厤過也 再失閏矣

> (3) 斗柄が申の方角を指していたことをいう。 周正の十一月 **麻〉で推算してみると、二十四の閏月が得られ、總計で** 歳で、(麻法上)二十六の閏月があるはずだが、今、〈長 わかる。文公十一年の三月甲子からこの年までは七十一 **閏月を二度置き忘れた〔二箇月餘分にかぞえた〕ことが** ずなのに、(二箇月前の)申の方角を指していたから、 は今〔夏正〕の九月にあたり、斗柄は戌の方角を指すは 二つの閏月が少ない。(なお)このことは『釋例』で詳

附三十年の傳文に

「臣生之歳 正月甲子朔 とある。また、疏に引く『釋例』に「閏者 會集數年餘 吏走問諸朝 師曠曰 魯叔仲惠伯會郤成子于承匡之歲也 甲子矣 其季於今三之一也(注 所稱正月 謂夏正月也) (注 在文十一年)是歲也 狄伐魯(中略)七十三年矣」 四百有四十五

月爲建亥 建之在申 斗建在申 魯之司歷 漸失其閏 至此年日食之月 以儀審望 日 因宜以安之 故閏月無中氣 斗建斜指兩辰之間也 今之九月十月十一月無冰 故知再失閏也 於是始覺其謬 遂頓置兩閏 以敘事期 若不復頓置二閏 而歲終焉 然則前閏月爲建酉 是故明年經書春無冰 乃是周家九月也 則明年春是今之九月十月十一月也 非天時之異 後閏月爲建戌 而其時厤稱十一 無緣揔書春也 傳以爲時災 以應天 知斗

有食之 於是辰在申 司曆過也 史書 十二月乙亥朔日有食之 傳曰 冬十一月乙亥朔日 り、同下の〈世經〉に「九月乙亥朔 是建申之月也 上に「於是辰在申 始以求之 近得其實矣」とある。なお、『漢書』律曆志 之 非真也 尋案今世所謂魯厤者 今俱不知其法術 且依春秋經傳 而司曆以爲在建戌 不與春秋相符 再失閏矣 史書建亥」とあ 殆末世好事者爲 言時實行以 反覆其終

> 十四年「無冰」の注に「書 時失」とあり、 元年「無冰」の注に「書を温」とある。

無冰

非天時之異

無緣揔書春也」とある。

また、 なお、

街甯喜の仲間である。 名を書いているのは、 にくんでであ

剛下の傳文に「衞人討甯氏之黨 なお、宣公十年に「齊崔氏出奔衞」とあり、傳に「書曰 故石惡出奔晉」とある。

非其罪也」とある。

〔襄公二十八年〕

爲十一月也 不察其建 不考之於天也」とあるのを參照。

經二十有八年春無冰

御前年に、閏月を二度置き忘れたことに氣づき、にわかに 二つの閏月を置いて、天の正にしたがった〔二箇月のず

に當たり、冰が無かったことを災として書く、ことが出 れを修正した)から、この年、正月が(きちんと)建子

來たのである。

附二十七年の傳文に「十一月乙亥朔日有食之 辰在申 麻過也 再失閏矣」とあり、その疏に引く『釋例』に「於 司

遂頓置兩閏 以應天正 以敘事期

然則前

則明年春是今之九月十月十一月也 是故明年經書春無冰 **閏月爲建西** 後閏月爲建戌 傳以爲時災也 若不復頓置二閏 十二月爲建亥 今之九月十月十一月 而歲終焉

經仲孫羯如晉

經秋八月大雩

經邾子來朝

附下の傳文に「孟孝伯如晉 告將爲宋之盟故如楚也」とあ 毬楚に朝する旨を告げたのである。 り、注に「魯 晉屬 故告晉而行」とある。

建催杼の仲間で、 經冬齊慶封來奔 酒色に溺れて出奔したのである。

名を書

を(經に)書いていないのは、位を絕たれ(もはや)卿いているのは、罪責してである。魯から吳に奔ったこと

ではなかった、からである。

崔杼立而相之 慶封爲左相 盟國人於大宮 曰 所不與附注の「崔杼之黨」については、二十五年の傳文に「丁丑

崔慶者」とある。

注の「自魯奔吳不書」については、下の傳文に「奔吳奔衞」とあり、傳に「書曰崔氏 非其罪也」とある。注の「書名 罪之」については、宣公十年に「齊崔氏出

御宋の盟にもとづいて、楚に朝したのである。 經十有一月公如楚

吳句餘予之朱方」とある。

附下の傳文に「爲宋之盟故 公及宋公陳侯鄭伯許男如楚」

御靈王である。一四十有二月甲寅天王崩

剛公羊の何注に、同文がみえる。

WTの傳文に「及漢 楚康王卒」とある。また、疏に「長倒康王である。十二月に「乙未」 はない。 日の誤りである。

麻推此年十二月戊戌朔」とある。

の向戌がこれを言い、明年には、饑饉がひどかった。そ餓「梓愼」は、魯の大夫である。この年に、鄭の游吉と宋團二十八年春無冰 梓愼曰 今茲宋鄭其饑乎

飢寒之不恤 誰能恤楚」とある。また、二十九年の傳文以歲之不易 聘於下執事」とあり、「宋向戌曰(中略)

附下の傳文に「鄭伯使游吉如楚(中略)子大叔曰(中略)

の事は、後の傳に詳しい。

傳歲在星紀 而淫於玄枵

に「於是鄭饑」とあり、「宋亦饑」とある。

今ここですでに玄枵にあった。(つまり) 行き過ぎて次星紀にあり、明年になって始めて玄枵にあるはずなのに、たの次である。十八年に、晉の董叔が,天道は多く西北危の次である。十八年に、晉の董叔が,天道は多く西北億 「歲」は、歲星〔木星〕である。「星紀」は、丑に當た倒「歲」は、歲星〔木星〕である。「星紀」は、丑に當た

を失したのである。

とある。 とあり、注に「歳在豕韋 月又建亥 故曰 多在西北」については、十八年の傳文に「董叔曰 天道多在西北」注の「十八年晉董叔曰 天道多在西北

に改める。 に改める。 は、「明言乃當在玄枵」の「言」は、諸本に從って、「年」注に「歲星十二歲而一周天」とある。 文に「晉侯曰 十二年矣 是謂一終 一星終也」とあり、注の「至此年十一歲 故在星紀」については、九年の傳

甅以有時菑

陰不堪陽

り、陰が陽に勝てず、地氣がもれ出たのである。が事を支配するはずなのに、温暖で冰が無かった。つま倒「時菑」とは、(春に)冰が無かったことである。盛陰

とあるのを參照。
| 関語記』月令に「孟冬行春令 則凍閉不密 地氣上泄」

傳蛇乘龍

の龍が)次を失して、虚・危の下に出た。(つまり)蛇歳星である。歳星は木で、木は青龍だからである。(そ倒「蛇」は、玄武の宿で、虚・危の星である。「龍」は、

附異説として、上の疏に「服虔云 歳爲陽 玄枵爲陰 歳に乘られたのである。

専钼文 専言歳在星紀而至於玄号 則歳星乘玄号矣 下これについては、張聰咸『左傳杜註辨證』に「案杜意與乘陰 進至玄枵 陰不勝陽 故温無冰」とある。なお、

分野)であり、角・亢は鄭(の分野)である。だから、伊歳星の基本の位置は東方にあり、東方の房・心は宋(の團龍 宋鄭之星也

||例『史記』天官書に「宋鄭之疆 ||侯在歲星 ||占於房心」と||龍(歲星)を宋・鄭の星としているのである。

あるのを参照

ない〔?〕。 いは、注の「本位」の「本」は、「木」の誤りかも知れなお、疏に「歳星屬木 木位在東方」とあるから、ある

る。 倒玄枵の三宿〔女・虚・危〕のうち、虚星がその中央にあ團宋鄭必饑 玄枵 虚中也

がやせる」と言っているのである。
(正冰が無く、地氣がもれ出た。だから、「土がからで民に冰が無く、地氣がもれ出た。だから、「土がからで民)の選ば、宋・鄭の星であるが、今ここで、定位置を失し、個枵 秏名也 土虚而民秏 不饑何爲

朝したのである。燕國は、今の薊縣である。に)朝見させる」〔二十七年傳文〕と言ったから、晉に「晉・楚に從っている諸侯を、たがいちがいに(楚・晉

酬疏に引く『譜』に「北燕

姬姓

召公奭之後也

周武王

之」とある。

さいたが、 居漁陽薊縣 其國辟小 不通諸夏 自召公至村之於燕 居漁陽薊縣 其國辟小 不通諸夏 自召公至村之於燕 居漁陽薊縣 其國辟小 不通諸夏 自召公至

る。 ㈱二十七年の傳文に「王曰 釋齊秦 他國請相見也」とあ選宋の盟で、齊と秦は除外した、からである。 **圑齊侯將行** 慶封日

我不與盟

何爲於晉

贈物をすすめて、おのれの心を滿足させる、ようにしな餓大國に仕えるには、まず相手の政事に從い、その後で、

ければいけない。

傅陳文子曰 先事後賄

禮也

注非」とあり、また、楊伯峻『春秋左傳注』に「賄謂財費用也」非賄賂之謂 慶封愛費用而止行 故言此喩之例異說として、『會箋』に「此事言朝聘諸侯之事也 賄言

從交相見 齊秦不與焉 趙孟日 晉之不能於齊 是齊之事晉 未獲如他諸侯也 **猶楚之不能於秦也**

解事爲政事 晉志也 晉欲齊服從不敢貳 失之」とある。 今往朝之 是如其志也 杜

④「重丘の盟」は、二十五年にある。

傳雖不與盟

敢叛晉乎 重丘之盟 未可忘也

子其勸行

附二十五年の傳文に「秋七月己巳同盟于重丘 齊成故也」

とある。

傳衛人討甯氏之黨 石氏之祀 故石惡出奔晉 衛人立其從子圃 以守

街石惡の先祖の石碏が衞國に大功をあげ、惡(自身) も、祭祀を絕つほどのものではなかったから、「禮にか の罪

なっている」と言っているのである。

附隠公四年の傳文に「君子曰 石碏 純臣也 大義滅親 其是之謂乎」とある。

惡州吁而厚

傳邾悼公來朝 時事也

建傳は、 いうことを言っているのである。 宋の盟は、晉・楚に朝した場合にのみ關わる、 來朝した〔魯に朝した〕のは、宋の盟のためでは

附上の傳文に「夏齊侯陳侯蔡侯北燕伯杞伯胡子沈子白狄朝

于· 晉· 宋之盟故也」とあり、 また、 一とある。 下の傳文に「爲宋之

公及宋公陳侯鄭伯許男如楚」

圑秋八月大雩 早也

傳蔡侯歸自晉 入于鄭 鄭伯享之 不敬

子産日

蔡侯其

不免乎

(1) | 倒禍を免れない、ということである。

傳日其過此也 ④ (「日」とは) 往日、晉に行く時に、ということである。

哪君使子展廷勞於東門之外 附文公七年の傳文「日衞不睦」の注に「日 往日」とある。 而傲

④「廷」は、往である。

書』五行志中之上に「君使子展往勞于東門 『説文』に「

迂

往也」とあるのを

参照。

ちなみに、

『漢 而敖」とあ

傳吾日猶將更之 今還 大國 而惰傲以爲己心 將得死乎 若不免 必由其子

受享而惰

乃其心也

君小國

事

其爲君也 淫而不父

剛三十年の傳文に「蔡景侯爲大子般娶于楚 団大子班の妻と淫通したのである。

通焉

大子弑

景侯」とある

如是者 恒有子禍

御三十年の、蔡の世子班がその君を弑したこと、のために 傳したのである

附三十年に「夏四月蔡世子般弑其君固」とある。

傳孟孝伯如晉 建魯は、 晉の屬國であるから、晉に告げてから行ったので 告將爲宋之盟故如楚也

傳蔡侯之如晉也 君實親辱 鄭伯使游吉如楚 及漢 楚人還之 日

④「君」とは、鄭伯をいう。

宋之盟

卿今吾子來 寡君謂吾子姑還 @鄭君が來朝すべきかどうかを問い合わせる、 ということ 吾將使馹奔問諸晉而以告

傳子大叔曰 宋之盟 君命將利小國 鎮撫其民人 以禮承天之休 而亦使安定其社稷

附宣公三年の傳文「以承天休」の注に「而受天祐」とある。 (建「休」は、 福祿である。

傅此君之憲令

而小國之望也

甅寡君是故使吉奉其皮幣 ④「憲」は、法である(『爾雅』釋詁)。

(迅聘には、乘皮(四枚の皮)と束帛(五匹の帛)を用いる。

附哀公七年の傳文に「邾茅夷鴻以束帛乘韋自請救於吳」と

圑以歲之不易 聘於下執事

④今年、饑饉があったから、鄭伯は自身で楚に朝すること が出來ない、ということである。

剛三年の傳文「以歲之不易」の注に「不易

多難也」とあ

る。また、二十九年の傳文に「於是鄭饑」とある。

傳令執事有命曰 女何與政令之有 必使而君棄而封守 渉山川 蒙犯霜露 以逞君心 小國脟君是望 敢不唯命 跋

國是懼 不然 其何勞之敢憚 是聽 無乃非盟載之言 以闕君德 子大叔歸 復命 而執事有不利焉 告子展

欲久 得乎 周易有之 在復≣

曰 楚子將死矣 不脩其政德

而貪昧於諸侯

以逞其願

傅之頤Ⅲ 鉧下が震(Ⅲ)で上が坤(Ⅲ)のが、「復」〔Ⅲ)である。

鉧下が震〔Ⅲ〕で上が艮〔Ⅲ〕のが、「頤」〔Ⅲ〕である。 「復」の上六(一番上の一)が(一に)變じて「頤」を

得る、ということである。

傳日

迷復

④ (これは) 〈復〉の上六の爻辭である。 「復」は、 反〔か える〕である。(つまり、〈復〉は)陰をきわめて陽にか えるという卦である。(その)上(六)は、どん詰まり

應がない〔上の應たるべき三が、同じく陰爻である〕かに位置し、迷ってかえり、道を遠くはずれ、遠いうえに

以上、いうのとなる。よう、危に「こませい」に下落と、例李鼎祚『周易集解』に「虞翻曰 坤冥爲迷高而无應 故

ら、凶なのである。

⊕鄭を來朝させて自分の本願にかえろうとしていることを團其楚子之謂乎 - 欲復其願とある。 | とある。 | 公」とあるのを参照。なお、疏に「上應在三 | 三亦陰爻〕

団徳を脩めていない。

甅而棄其本

附上の傳文に「不脩其政德」とある。

圑復歸無所 是謂迷復

母楚子は必ず死ぬから、君が往けば、その葬を送ることに

團楚不幾十年 未能恤諸侯也なる、ということである。

の注に、同文がみえる。なお、その悧を参照。 附注の「幾 近也」については、十一年の傳文「國幾亡」もまた難かしい、ということである。 の注に、がえるの()(幾)は、近である。道を遠くはずれた者は、かえるの

王合諸侯于申 距今八年 故曰 不幾十年」とある。なお、疏に「服虔云 此行也 楚康王卒 至昭四年楚靈

傳吾乃休吾民矣

害をなすことが出來ない、ということである。(『爾雅』釋詁)。楚はもはや(鄭に)

団神竈」は、鄭の大夫である。
関神竈日 今兹周王及楚子皆將死

のすまい〕を棄てて、玄枵に寄寓したのである。歳星の健「旅」は、客處〔寄寓〕である。歳星が星紀の次〔本來

甅歲棄其次 而旅於明年之次 以害鳥帑 周楚惡之

附昭公九年の傳文に「鄭裨竈曰」とある。

分野であるから、周王・楚子がその咎を受けるのである。の尾を「帑」という。(南方の)鶉火・鶉尾は周・楚の向かいの南方でおこるのである。南方は朱鳥であり、鳥をもたらすべき歲星が)北方で次を失したから、禍が眞すまいに當たれば、その國に福があるのだが、(今、福すまいに當たれば、その國に福があるのだが、(今、福

示したのである。をとり舉げて、卜占は人それぞれである、ということをが死ぬ」といっている。(つまり) 傳は、わざわざ兩者は「宋・鄭に饑饉がある」といい、裨竈は「周・楚の王

ともに、歳星が次を行き過ぎたことを論じたのに、梓愼

附注の「旅 客處也」については、莊公二十二年の傳文「辭

日の羇旅之臣」の注に「旅の客也」とある。

える。 の傳文「越得歲而吳伐之 必受其凶」の注に、同文がみ 注の「歲星所在 其國有福」については、昭公三十二年

に改める〕については、疏に「當福之衝 其國有禍」と注の「失次於北 禍衝在南」〔諸本に從って、「此」を「北」

昌 其對爲衝 歲乃有殃 當居而不居 越而之他處 主ある。なお、『淮南子』天文訓に「歲星之所居 五穀豐

死國亡」とあるのを參照。

た、『晉書』天文志上に「自柳九度至張十六度爲鶉火文訓に「柳七星張 周 翼軫 楚」とあるのを参照。ま注の「鶉火鶉尾 周楚之分」については、『淮南子』天

鶉尾 於辰在巳 楚之分野 屬荆州」とあるのを參照。於辰在午 周之分野 屬三河 自張十七度至軫十一度爲た 『晉書』天文志上に一自柳九度至張十六度爲鶉火

①「外僕」は、次舎をつかさどる者である。 圑外僕言曰 昔先大夫相先君適四國 未嘗不爲壇 附疏に「服虔本作墠 解云除地爲墠」とある。

適小 則爲壇 小適大 苟舍而已 焉用壇 僑聞之 + 側日是至今亦皆循之 今子草舍 無乃不可乎 子産曰 + 側昭公十三年の傳文に「子產命外僕速張於除」とある。

倒「刑」は、法である。 適小有五美 宥其罪戾

赦其過失 救其菑患

賞其德刑

| 別隠公十一年の傳文「許無刑而伐之」等の注に、同文がみ|

告後人 無怠於德

がみえる。なお、その剛を參照。剛文公十五年の傳文「曰 君弱 不可以怠」の注に、()(怠」は、解〔おこたる〕である。

傳小適大有五惡 說其罪戾

街自らを辯解する、ということである。

回請其不足 行其政事

團共其職貢 従其時命(鄧大國の政をそのとおりに實行する、ということである。

倒朝會の命に從う、ということである。

化哪不然 則重其幣帛 以賀其福而弔其凶 皆小國之禍也

) 通禍をあきらかにして子孫に告げる必要はない、というこ焉用作壇以昭其禍 所以告子孫 無昭禍焉可也

とである。

(29)

同文

嘎齊慶封好田而耆酒 與慶舍政

④「舍」は、慶封の子である。 慶封は、 政權を握ったが、 自分で政治を行なわず、舍に任せていたのである。

附二十七年の傳文に「慶封當國」とある

日 舍 慶封之子也 生傳其職政與子」とある。 なお、『史記』齊世家「慶舍用政」の〈集解〉に「服虔

甅則以其內實遷于盧蒲嫳氏 易內而飮酒 ④「内實」とは、寶物・妻妾である。 嫳の家に移り住んで

④盧蒲氏におもむいて、 封に朝見したのである。

傳數日 國遷朝焉

いたのである。

嘎使諸亡人得賊者 以告而反之

甅故反盧蒲癸 癸臣子之 ④「亡人」とは、崔氏の亂を避けて出奔した者である。

④「子之」は、慶舍である。

圑有寵 妻之

母子之は自分のむすめを癸にめあわせたのである。

④「辨」は、別である。姓を別にして始めて、娶ることが **甅慶舍之士謂盧蒲癸曰 男女辨姓 子不辟宗** 出來る。慶氏と盧蒲氏は、いづれもみな、姜姓である。 何也

附注の「辨 別也」については、二十五年の傳文「偃曰

男女辨姓」等の注に、同文がみえる。なお、その附を參

傳日 宗不余辟

毬舍の方が自分にめあわせようとしている、 ということで

不倒余獨焉 辟之 賦詩 斷章 余 取所求焉 惡識宗

() 自分の方も、 慶氏に求めようとするからには、 中の一章だけを取る、ようなものである、ということで えば、詩を賦する場合に、(本旨とかかわりなく)その を氣づかってなどいられないのであり、(それは)たと もはや禮

團癸言王何而反之 二人皆嬖

④二子は、いづれもみな、莊公の黨與である。二十五年に で、もどって慶氏に寵を求め、莊公のために復讎しよう 崔氏が莊公を弑したとき、癸と何は出奔したが、今ここ としたのである。

に「二子 莊公黨 爲二十八年殺慶舍張本」とある。 二十五年の傳文に「盧蒲癸奔晉 王何奔莒」とあり、注 なお、注の「來」は、諸本に從って、「求」に改める。

④「寢戈」は、身近に置く武器(枕槍)である。 **傳使執寢戈而先後之**

() 御大夫の膳食である。

圑饔人竊更之以鶩 御者知之 則去其肉 ④「御」は、食を進める者 (給仕人) である。 料理人と給 仕人が、諸大夫に慶氏を怨ませようとして、その膳を減 而以其洎饋

らしたのである。おそらく、盧蒲癸と王何の策謀であろ

傅子雅子尾怒

④二子は、いづれもみな、恵公の孫である。

|附昭公三年の傳文に「二恵競爽猶可」とあり、注に「子雅 恵欒高氏皆耆酒」とあり、注に「欒高二族皆出惠公」と 宇公孫竈公孫蠆誅封」の高注に「公孫竈 惠公之孫 ある。なお、『呂氏春秋』愼行「慶封出獵 子尾皆齊惠公之孫也」とある。また、同十年の傳文に「齊 景公與陳無

也」とあるのを参照

子欒堅之子子射也

惠公之孫 公子高祈之子子尾

圑慶封告盧蒲嫳

倒二子が怒っていることを嫳に告げたのである。

嘎盧蒲嫳日 譬之如禽獸 吾寢處之矣

母殺してその皮を敷物にしてみせる、ということである。

磚使析歸父告晏平仲

倒いっしょに、子雅・子尾を謀殺しようとしたのである。 嬰之衆不足用也 知無能謀也 言弗敢出

> **圑**有盟可也 子家曰 子之言云 母計謀をもらすようなことはしない、ということである。

④「子家」は、析歸父である。

附異説として、安井衡『左傳輯釋』に「衡案 下文謂子家

析歸父 非傳例也 今案 孔父華父之類 皆是字 速歸 注子家慶封字 傳例凡同名字者 必加氏號以別之 此前後兩子家 皆單稱其字 而杜一以爲慶封

爲其字 其誤與以孔父爲嘉名同 然則此子家亦謂慶封矣 父亦字非名也 古人名字相配 杜以歸父爲名 故以子家 蓋析歸父旣告晏平仲 平仲以其事重大 自往慶封之家

答之 傳不言之者 云子家曰 則平仲往其家可知也 平仲往其家而面荅之 故云 子之言云 又焉用盟 若是

也」とある。

析歸父 當還報慶封

不得專辭其盟 益知此子家亦慶封

甅又焉用盟 告北郭子車

④「子車」は、

齊の大夫である。

團子車曰 人各有以事君 非佐之所能也

母「佐」は、子車の名である。

傳陳文子謂桓子

団「桓子」は、文子の子の無字である。

傳日 禍將作矣 吾其何得對曰 得慶氏之木百車於莊

べられる道〔大通り〕に積んでいたのである。

附隱公十一年の傳文「及大逵 弗及」の注に「逵 道方九

略)九達謂之逵」とあるのを參照。 軌也」とある。なお、『爾雅』釋宮に「六達謂之莊(中

磚文子曰 可愼守也已

碅盧蒲癸王何卜攻慶氏 示子之兆 倒貨財を欲しがっていないことをほめたのである。

街龜の兆である。

附昭公五年の傳文に「龜兆告吉」とある。

原 时或 卜攻讎 计文献 其兆子之,曰克 封田于萊 陳無宇從 丙辰文子使召之 請曰 見血 無宇之母 冬十月慶

疾病 請歸 慶季卜之

傳示之兆 ④「季」は、 慶封である。 日 死奉 龜而泣

④無字が泣いたのである。

磚乃使歸 慶嗣聞之

傳日 禍將作矣 謂子家速歸 ④ 「嗣」は、慶封の一族である。

団「子家」は、慶封の字(あざな)である。

④「嘗」は、秋の祭である。

磚禍作必於嘗

附桓公五年の傳文に「始殺而嘗」とあり、注に「建酉之月

『爾雅』釋天に「秋祭曰嘗」とあるのを參照。また、桓 陰氣始殺 嘉穀始熟 故薦嘗於宗廟」とある。なお、

公八年の公羊傳文に「秋曰嘗」とあるのを參照

④「悛」は、改寤である。 傳歸猶可及也 子家弗聽 亦無悛志

| 附成公十三年の傳文「康猶不悛 入我河曲」等の注に「悛

改也」とある。

傳子息曰 亡矣 幸而獲在吳越

④「子息」は、 慶嗣である。

傳陳無宇濟水 而戕舟發梁

④「戕」は、殘壞〔こわす〕である。 慶封に難を救援させ たくなかったのである。

|附『孟子』告子上「脟戕賊杞柳||而後以爲桮棬也」の趙注 に「戕猶殘也 春秋傳曰 戕舟發梁」とあるのを參照。

団「姜」は、癸の妻で、慶舍の女(むすめ)である。

嘎盧蒲姜謂癸曰 有事而不告我 必不捷矣

附上の傳文に「癸臣子之(注 子之 慶舍)有寵 妻之(注 子之以其女妻癸)」とある。

傳癸告之

個姜曰 夫子愎 莫之止 將不出 倒慶舍を殺そうとしていることを告げたのである。 我請止之

④「夫子」とは、慶舍をいう。

(登祭事に臨席しようとしたのである) 諾 十一月乙亥嘗于大公之廟 慶舍涖事

剛僖公三年「冬公子友如齊涖盟」等の注に「涖 ある。なお、その剛を參照。 臨也」と

母公がいる所(大公の廟)へ行ったのである。

嘎盧蒲姜告之 且止之 弗聽

日

誰敢者 遂如公

圑麻嬰爲尸

圑慶奊爲上獻 母祭の尸(かたしろ)となったのである。

④廟は公宮内にあったのである。 團盧蒲癸王何執寢戈 慶氏以其甲環公宮 ④「上獻」とは、まっ先に(酒を)獻ずる者である。

傳陳氏鮑氏之圉人爲優 団「優」は、俳〔芝居〕である。

附六年の傳文「長相優」の注に「優 お、『國語』晉語一「公之優曰施 通於驪姬」の韋注に 調戲也」とある。な

甅慶氏之馬善驚 士皆釋甲束馬 俳也」とあるのを參照

④「束」とは、つなぎとめたのである。

磚而飲酒 ら、そこまで行って見物したのである。 「魚里」は、里の名である。芝居は魚里で演じられたか 且觀優 至於魚里

傳欒高陳鮑之徒介慶氏之甲

④「欒」は子雅、「高」は子尾、「陳」は陳須無、「鮑」は 鮑國である

附下の傳文に「公懼 鮑國曰 羣臣爲君故也 陳須無以公

歸」とある。なお、上の傳文「子雅子尾怒」の剛を參照

下侧子尾抽棉 擊擊 扉三

④「桷」は、椽(たるき)である。「扉」は、 門闔

附注の「桷 椽也」については、莊公二十四年「春王三月 とびら)である。桷で扉をたたいて合圖したのである。 刻桓宮桷」の注に、同文がみえる。なお、異説として、

安井衡『左傳輯釋』に「博雅 桷 槌也

以備爲期 至此抽出之 以擊門扉也

尾欲擊門扉以爲期而已 安須極力抽之哉 言廟以別此桷 傳意易知 杜偶不喩耳」とある。 下文云援廟梅

之扉」とあるのを参照 注の「扉『門闔也」については、『爾雅』釋宮に「闔謂

動於甍

甅盧蒲癸自後刺子之 王何以戈擊之 解其左肩

猶援廟桷

附『説文』に「甍 「甍」は、屋棟(いらか)である。 屋棟也」とあるのを参照。

傳以俎壺投 殺人而後死

餓慶舍が怪力だったことを言っているのである。

椽不易抽 子尾插小槌於

圑逐殺慶繩麻嬰

④「慶繩」は、慶奊である。

剛上の傳文に「慶奊爲上獻」とある。

倒公室を尊ぼうとしたのであって、 亂をおこしたのではな 鮑國日 羣臣爲君故也

い、ということである。

磚陳須無以公歸 稅服而如內宮

遇告亂者 丁亥伐西門 弗克 還伐北門 克之 (3)公が外の難を懼れたことを言っているのである。

入 伐內宮

(1)陳・鮑が公のそばにいたからである。

傅弗克 反 陳于嶽

④「嶽」は、里の名である。

例 『孟子』 滕文公下 「引而置之莊嶽之間數年」 の趙注に 「莊

個請戰 弗許遂來奔獻本事於季武子美澤可以鑑 齊街里名也」とあるのを参照

附昭公二十八年の傳文に「昔有仍氏生女 驥黑而甚美 倒光りかがやいて、(鏡のように) 形を映したのである。 可以鑑」とあり、注に「髪膚光色 可以照人」とある。 光

傅展莊叔見之 (建魯の大夫である。

車甚澤 人必瘁 宜其亡也 叔孫穆子食慶封

慶封

殃 天其殃之也 其將聚而殲旃

⑪禮では、食前に祭をする。 先にすべきものがあることを 示すためである。「氾祭」とは、祭品を遠くまき散らし (きまった場所に置かず)、つつしみがなかった、とい

うことである。

團穆子不說 使工爲之誦茅鴟 附二十七年の傳文に「叔孫與慶封食 不敬」とある。

(型「工」は、樂師である。「茅鴟」は、逸詩である。不敬 を譏ったのである。

附四年の傳文「工歌文王之三 又不拜」

等の注に「エ

樂

人也」とある。なお、その附を參照

圑亦不知 既而齊人來讓

磚奔吳 吳句餘予之朱方 () 魯が慶封を受け入れたことを責めたのである

餓「句餘」は、吳子夷末である。 「朱方」は、吳の邑であ

|附異説として、疏に「服虔以句餘爲餘祭」とある。 に、二十九年に「闉弑吳子餘祭」とあり、昭公十五年に ちなみ

僡聚其族焉而居之 富於其舊 子服惠伯謂叔孫曰 淫人 慶封又富矣 穆子曰 善人富謂之賞 淫人富謂之 「春王正月吳子夷末卒」とある。

天殆富

(銀「殲」は、盡であり、「旃」は、之である。昭公四年の、 慶封を殺したこと、 のために傳したのである!

附注の「殲 盡也」については、僖公二十二年の傳文「門 官殲焉」等の注に、同文がみえる。なお、その附を參照。

旃」の注に、同文がみえる。なお、その剛を參照 注の「旃 之也」については、桓公十年の傳文「虞公求

齊慶封殺之」とある。 注の「爲昭四年殺慶封傳」については、昭公四年に「執

傳癸巳天王崩 未來赴 亦未書 禮也

()) この時、すでに喪を聞いていたため、書くべきであるか にまぎらわしいから、例を發したのである。

傳崔氏之亂 之丘 喪羣公子 故鉏在魯 叔孫還在燕 賈在句瀆

母裏公二十一年にある。

附二十一年の傳文に「執公子買于句瀆之丘 叔孫還奔燕」とある。 公子组來奔

傅及慶氏亡 皆召之 具其器用 而反其邑焉

④「反」は、還(かえす)である。

とあるのを参照 『儀禮』 士冠禮「主人受眡 反之」の注に「反 還也」

噶與晏子邶殿其鄙六十

④「邶殿」は、齊の別都である。 邶殿のはずれの六十邑を

傳弗受 子尾曰 富 人之所欲也 晏嬰に與えたのである。

富也 足欲 亡無日矣 之邑足欲 故亡 吾邑不足欲也 恐失富也 在外 不得宰吾一邑 不受邶殿 且夫富 如布帛之有幅焉 爲之制度 益之以邶殿 何獨弗欲 對曰 乃足欲

使無遷也

④ 「遷」は、移である。

附昭公四年の傳文「吾不遷矣」の注に、 お、『國語』齊語「不見異物而遷焉」の韋注に「遷 同文がみえる。 移

也」とあるのを參照。

0個夫民 生厚而用利 於是乎正德以幅之

④厚(豐かさ)と利(便利さ)は、いづれもみな、人が欲 る。 つけ〔制限を設け〕なければいけない、ということであ するものであるが、正徳によって、それらに一定の幅を

傅使無黜嫚

④「黜」は、放〔放縱〕と同じである。

不出入于幅之内外也」とある。

所謂幅也

與北郭

磚謂之幅利 利過則爲敗 吾不敢貪多

附異説として、『會箋』に 一黜

退

嫚

過

無黜嫚

言

佐邑六十 受之 與子雅邑 辭多受少 與子尾邑 受而

④「致」とは、公に返したのである。

傅公以爲忠 ④ 「釋」は、放 (放逐) である。 故有寵 釋盧蒲嫳于北竟

傅求崔杼之尸 將戮之 不得 叔孫穆子曰 必得之 武王

④「亂」は、治である 〔『爾雅』釋詁〕。 有亂臣十人

|附『論語』泰伯「武王曰 予有亂臣十人」の〈集解〉に「馬 日 亂 治也」とあるのを參照

(附)

『周禮』大僕「建路鼓于大寢之門外

而掌其政」の注に

與石經合 案石經此行止九字 蓋初刻有臣字 後改正也 なお、挍勘記に「宋本宋殘本淳熙本岳本足利本無臣字 惠棟云 石經論語亦然 又昭廿四年傳引大誓亦無臣字

後人皆據晉時所出古文大誓以益之 非也 顧炎武云

石經脫臣字 失之」とある。

團崔杼其有乎 不十人 不足以葬

鉧葬るには十人が必要だが、崔氏は十人に心を同じくさせ ることが出來ないから、必ず見つかる、ということであ

附昭公二十四年の傳文に「余有亂臣十人 同心同德」とあ

傳旣

崔氏之臣曰

與我其拱壁

健催氏の大璧である。

手也 此璧兩手拱抱之 故爲大璧」とある。 の注に「拱璧 公大璧」とある。なお、疏に「拱謂合兩

附三十一年の傳文「六月辛巳公薨于楚宮 叔仲帶竊其拱璧」

傳吾獻其柩 於是得之 十二月乙亥朔齊人遷莊公 殯于大

餓あらためて莊公を路寢で殯したのである。 が朔であり、「乙亥」は誤りである。 十二月は戊戌

「大寢 路寢也」とあるのを參照。ちなみに、『爾雅』

釋詁に「路 大也」とある。

甅以其棺尸崔杼於市

御崔氏は、莊公を弑し、しかも、葬るのに禮の規定どおり にしなかったから、莊公の棺を崔杼の尸(しかばね)の

附二十五年の傳文に「崔氏側莊公于北郭(注 側 そばに置いて、その罪を明らかにしたのである。

待五月) 四翣(注 喪車之飾 諸侯六翣) 不蹕(注 不殯於廟) 丁亥葬諸士孫之里(注 死十三日便葬

齊舊依上公禮九乘 又有甲兵 止行人) 下車七乘 不以兵甲(注 下車 今皆降損)」とある。 送葬之車

傳國人猶知之 皆日 崔子也

倒はじめに崔杼の尸を探したときは、見つからなかった(た

な識別した,と言っているのである。め、これが本物かどうか疑わしい)から、傳は,國人がみ

疏に「始求崔杼尸不得 嫌以他尸代之 傳言國人猶知之剛上の傳文に「求崔杼之尸 脟戮之 不得」とある。なお、

皆曰崔子 言猶尙識其形 知是眞崔子也」とある。

運すでに楚にいたのである。

甅爲宋之盟故

公及宋公陳侯鄭伯許男如楚

公過鄭

鄭伯

に至り、西へ流れて洧水にそそいでいた。 趙熒陽の宛陵縣の西部に黃水があり、西南へ流れて新鄭城團伯有廷勞於黃崖 不敬

傳敬可棄乎

⊕先祖を承けてその家を守る方法がない、ということであ團敬 民之主也 而棄之 何以承守ということである。 ということである。 選伯有が罰せられなければ、必ずや、逆に鄭國の害となる、

傳鄭人不討 必受其辜 濟澤之阿

() やせた土ということである

に「阿 水崖也」とあるのを參照。 附『穆天子傳』卷之一「丙午天子飮于河水之阿」の郭璞註

傅行療之蘋藻

||例『詩』召南〈采蘋〉「誰其尸之||有齊季女」の毛傳に「蘋||銀末な菜ということである。

藻 薄物也」とあるのを参照

甅寘諸宗室

甅季蘭尸之 敬也

ປ金宗廟にすすめるということである。

役をさせても、神がこれを受けるのは、敬があるからで倒蘋藻の菜を阿澤の中から取り、蘭を身につけた女に主人

したのである。銀三十年の、鄭が良霄(伯有)を殺したこと、のために傳

圑及漢 楚康王卒 公欲反 叔仲昭伯曰 我楚國之爲附三十年に「鄭人殺良霄」とある。

御「昭伯」は、叔仲帶である。

爲一人 行也

とあるのを參照。なお、三十一年の傳文に「六月辛巳公の韋注に「叔仲昭伯 魯大夫 叔仲惠伯之孫叔仲帶也」卿『國語』魯語下「叔仲昭伯曰 君之來也 非爲一人也」

薨于楚宮 叔仲帶竊楚拱壁」とある。

傅子服惠伯曰

君子有遠慮

小人從邇

④「邇」は、近である。

附僖公二十二年の傳文「戎事不邇女器」等の注に、同文が

みえる。なお、その剛を参照

傅飢寒之不恤 誰遑其後

④「遑」は、暇である。

附八年の傳文「不遑啓處」の注に、 同文がみえる。 なお、 その附を参照

傳不如姑歸也 叔孫穆子曰 叔仲子專之矣

(独事をまかせられる、ということである。

傳子服子 始學者也

団まだ遠くを知らない、ということである。

④「成伯」は、榮駕鵞である。 **傳樂成伯曰 遠圖者 忠也**

附定公元年の傳文に「榮駕貸日 生不能事 死又離之

に改める。 なお、注の「駕」は、定公元年の傳・注にあわせて、「鴐」 自旌也」とあり、注に「鴛鴦 魯大夫榮成伯也」とある。

選昭伯の意見に從ったのである。

傅公遂行

團宋向戌曰 我一人之爲 非爲楚也 飢寒之不恤

誰能恤

姑歸而息民 待其立君而爲之備

楚

圑楚屈建卒 趙文子喪之如同盟

御宋の盟で、(楚人が)衣の中に甲を着込むという仲違い

があったが、それによってよしみを廢することがなかっ

たから、「禮に適っている」と言っているのである。

剛二十七年の傳文に「楚人衷甲」とあり、注に「甲在衣中 欲因會擊晉」とある。

④「徴」は、審〔あきらかにする〕である。 ここの遅い赴 傳王人來告喪 問崩日 以甲寅告 故書之

子の怠慢(の結果)であるから、これによって例を發し 告は、しかるべき理由があってのことではなく、單に臣

附注の「徴 審也」については、昭公三十年の傳文「且徴 たのである。

注の「此緩告」については、上の傳文に「(十一月) 癸 過也」の注に「徴明也」とある。

巳天王崩 未來赴 亦未書 禮也」とある。

(揺稿の連載は、 頂いた本誌の編集諸氏と、おつき合い頂いた讀者諸氏に對し、 本回をもって終了いたします。長い間お世話を

注全譯の完結篇『春秋左氏傳杜預集解下』が刊行される豫定で厚く御禮申し上げます。なお、近近に汲古書院より、春秋三傳